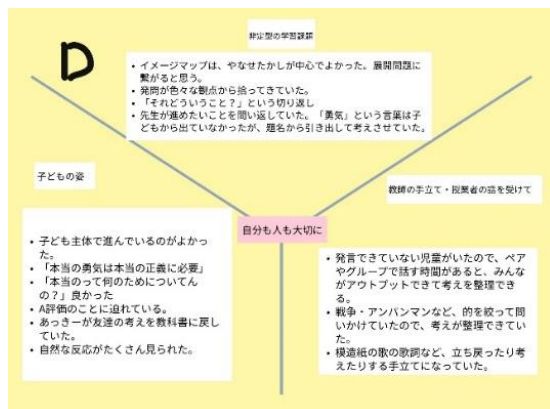




それぞれの考えを見ることができるよう、工夫した。

協議は、「非定型の学習課題」「子どもの姿」「教員の手立て」の3本柱を中心に行った。



### 3 実践の成果と課題

#### (1) 教師の変容

研究テーマに対する教員自身の授業の変容として、「人を大切にする聴き方・話し方」を授業の中で意識的に位置付けるようになった点が挙げられる。発言を促すことにとどまらず、相手の考えを受け止め、つなぎ、深めることを重視する授業づくりへと意識が変化した。また、学ばせたいことや気づかせたいことから逆算して授業を構成する姿勢が強まり、教材の本質に迫る発問や学習活動を工夫するようになった。説明文など、これまで指導に難しさを感じていた教材についても、研究を進める中で理解が深まり、指導の質の向上につながった。

#### (2) 深まった実践・研究方法

学年研究を基盤としながら校内で国語科を研究することで、学年間の系統性を意識した授業づくりが進んだ。さらに、単元計画を重視し、「子どもの思考の流れ」に沿って授業を構成することや、非定型の問いを取り入れることで、多様な考えを引き出す実践が広がった。

#### (3) 子どもの変容

形式的に聞くのではなく、「同じ」「似てい

る」といった言葉を用いながら、友だちの意見を自分の考えに取り込もうとする姿が増えてきた。また、自分の考えや感想を文章で表現できる児童が増え、話す相手も「先生」から「クラスみんな」へと意識が広がっていった。聞くことの価値を理解し、子ども同士で「今は聞くんだよ」と声を掛け合う場面も見られ、非定型の問いによって、これまで発言が少なかった児童が活躍する場面や、お互いの考えを尊重し合う場面も生まれた。

### 4 今後の展開

教科によっては、自分の意見を述べる段階で終わり、友だちの考えを聞いて深めるところまで至らない場面があること、「できる学力（読む力・書く力・計算する力）」を支えながら、「分かる学力」を伸ばす発問の難しさなどが課題として挙げられる。また、切り返しや関連付け、板書のまとめ方など、教員のファシリテート力のさらなる向上も求められる。

今後は、学年に応じた積み重ねを意識し、最終的に「子どもたちがお互いを認め合い、どんな意見でも安心して出し合える6年生」の姿につながる系統的な指導を継続していきたい。授業を見合う機会や子ども同士が学び合う場をさらに充実させるとともに、教材研究に時間をかけ、研究テーマに即した実践を積み重ねていく。教員自身が学び続ける姿勢を大切にしながら、児童一人ひとりが安心して考えを出し合い、互いに高め合う授業づくりを目指していきたい。

